

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 赤井益久著『中唐詩論集－研究・講演・書評』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土谷, 彰男, Tsuchiya, Akio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001584

〔書評〕

赤井益久著

『中唐詩論集——研究・講演・書評』

土谷彰男

『中唐詩論集——研究・講演・書評』は、國學院大學名誉教授の赤井益久氏の著された研究論集であり、このたび二〇二四年五月に研文出版より刊行された。氏の「中唐」を冠された研究論集は、さきには『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年。小稿はこれを前書と呼ぶ）の一書を世に問うておられ、本書はこれに続く中唐詩歌研究の珠玉の書である。人物は、元稹・皎然・張籍・李紳・王孟韋柳を論じ、詩話詩論は、主に皎然『詩式』、嚴羽『滄浪詩話』、方回『瀛奎律髓』、楊士弘『唐音』、高棟『唐詩品彙』を分析する。前書が、劉長卿、韋応物、白居易、元結、顧況、王建（張王楽府）、劉禹錫、孟郊、韓愈、杜甫等を論じたため、この二書によって中唐文学は、その射程とする晩唐を含め、これを確実に把握しうるところとなった。この分

野の先端的研究成果は、この二書をもって一目瞭然のものとなったのである。

中唐詩歌研究は、つとに元和期の白居易・韓愈・柳宗元等を主とした作家作品研究の重層の上に成り立つ。一九八〇年代に入り傳璇琮氏などによる実証的研究（『唐才子伝校箋』一九八七、『唐代詩人叢考』一九八〇など）が陸續と出てくるようになり、続く蔣寅氏の『大曆詩風』（一九九二）及び『大曆詩人研究』（一九九五）が世に問われるところとなった。わが国においても、『白居易研究講座』（一九九八）、『中唐文学の視角』（一九九八）など、作家や作品の横断的研究が盛んになり、この分野における研究課題の数々が浮き彫りとなってきた。前書を繙けば容易に知られるように、氏の問題意識ははやくも一九八十年代初めより胚胎する。また、氏の一連の研究は中国にあっても二〇一四年に中華書局より『中唐文人の文芸及其世界』の一書として公にされている。本書は、今日に至るまで中唐詩歌研究の先駆者として斯文を牽引されてこられた氏の軌跡を余すところなく窺い知うる絶好の書である。

本書は第一部「中唐詩論集」第二部「講演集」第三部「書評集」により構成される。右に述べたとおり氏の問題意識を探ろうとするならば、このうち「書評集」に詳しい。そこには、○

第一章「蔣寅著『大曆詩風』」○第二章「孟二冬著『中唐詩歌之開拓與新變』」○第三章「王毅著『園林與中國文化』」○第四章「川合康三著『終南山の變容——中唐文學論集』」○第五章「松本肇著『柳宗元研究』」○第六章「松原朗著『中國離別詩の成立』」を収め、日中双方にわたる論評を一覧しうる。氏の問題意識の所在が知られるのみならず、この間の中唐詩歌研究の動向が知られるようになり、これらを一書において示された意義は極めて大きい。とりわけ、中唐詩歌の独自性を伝統や規範からの逸脱にあると評する氏の研究姿勢は、前書に中唐文學を定位する際、第一に「（中唐詩人は）文學の規範性およびその變化に自覺的・自律的に関与しようとした」（『中唐文學研究序説』）と掲げた点に相通するものであり、以下に取り上げる本書の第一部「中唐詩論集」の各論考においてもこの通りに示される。

第一章「元稹の政治と文學」（二〇〇二）、及び第二章「自注の文學——『元氏長慶集』を中心として」（二〇〇二）は、いずれも元稹に係る論考である。このうち前者は、前書の「元稹の文學理念」（一九九〇・一九九二）を承け、元和五年の江陵左遷と元和十年の通州司馬の二点を手がかりとして、元稹の文學の變遷を掘り下げる。元稹は制舉登第に向けて策問を物し、初任官である左拾尉では論表を頻々と奏じた。ここより元稹の「直

言の士」たる政治姿勢を窺うに足るが、本書ではさらに、彼の論表に依拠して徳宗の藩鎮政策や順宗の永貞改革を探る試みがなされている。これを表狀制誥に広げれば、当時の財政經濟政策（兩税法）や官僚制度（令外官）の実態を窺いえよう。元和五年の点に係る「江陵途上十七章」詩は、本詩が白居易をして驚かしたことを六義「比興」に擬した試みに求め、ここにおいて元稹の文學理念に「寄興」が打ち立てられたことを看破した。本詩についてはまた、本書の第二章「自注の文學」に「使東川」二十二首を詳細に分析するなかで、元稹の詩は、白居易の認める「多情」のもと昂揚した感情が表出されているとともに、自注を通じてその真意を知らせようとしたものであることを見抜き、その上で、本詩には自注が付されていないため、元和五年の江陵流謫を境に抒情（多情）から諷喻（比興・寄興）へ推移したとして、兩作にはこれが対蹠的に表れているとした。

一方、元和十年の点に係る「叙詩寄樂天書」は、前書の「中唐詩壇諷喻詩の系譜」（一九八二）の通り、元稹の「寄興」の重視によって白居易の「諷喻」や「兼濟・独善」が喚起された点（『与元九書』）を確認しつつ、本書では文集の自家編纂において、白居易の「閑適」に相当するものとして、元稹の「私」なる部分を探る試みがなされている。

第三章「唐寂皎然の詩論について——中国詩学「景情交融」の主題に即して」(二〇〇六)、及び第四章「皎然の文学史観について」(書き下ろし)は、いずれも詩僧皎然の詩論『詩式』の分析を中心とする。『詩式』は、古くは空海「文鏡秘府論」を通じて知られ、また、その研究は趙昌平氏「従王維到皎然」(一九八七)、興膳宏氏「皎然『詩式』の構造と理論」(一九九五)等をはじめ比較的盛んに行われている。本書は、前書の「中唐の「意境説」をめぐって」(一九九二)を発展させたものであつて、本書にはまた第Ⅱ部「講演集」のうち第一章「思いと言葉——「言意の弁」をめぐって」が理解の補助線となっている。かねてより氏の問題意識の所在は、山水詩の評語である所謂「景情交融」を詩論の側から解明するところにあつた。すなわち、魏晋玄学において「言意の弁」(周易)の矛盾が「象」(「忘象」≡魏・王弼)によつて止揚されるとともに、南朝文学において山水の象(南宋・謝靈運)が導かれ、中唐の皎然に至つて物と意との関係が「境」によつて体系的に把握されたとする。この点において『詩式』は画期をなし、のちの権徳輿や司空図の詩説への影響(前書に詳しい)を見通しておられる。また、『詩式』の所論に対しては、詩経六義の比興の再解釈、老莊玄学の影響、鍾嶸『詩品』の否定、六朝文学の重視、「頓悟」に見られる南

宗禪との関連(詩禪相関)、「復古通変」——復古の行き過ぎを戒め新變の意義を強調するといった点をめぐつて詳細な考察がなされている。さらに、『詩式』の文学史観については、詩経以降、漢代古詩十九首より初唐の沈宋に至るまで「文体四変」と捕捉された点を詳細に分析しておられる。なお、皎然以降、司空図や嚴羽「滄浪詩話」が続くが、謝思煒『禪宗与中国文学』(一九九三)は、『詩式』を継承するものとしてこれら三者にわたる展開を考察し、『詩式』所論の意義と影響を論じている。第五章「張籍の「古風二十七首」」(書き下ろし)、及び第六章「李紳詩憶説」(一九七九)は、中唐の諷諭詩の諸相を捉える。このうち前者は、前書に「張王樂府論」(一九八〇・一九八一)として樂府論の見地から張籍と王建の両者を論じたが、本書では、張籍の「古風」と題する非樂府系の五言詩(二十六首)を分析し、その諷諭(「学仙詩」「董公詩」)は彼の樂府詩に連なり、その詩風は復古において詩経の雅正(元結「饒中集」沈千運)を継承しようとしたものとみなし、したがつて、「古風」詩はその伝統と形式において張王古樂府にもまして詩人の創作理念をより明らかに示していると指摘する。また後者は、白居易「新樂府五十首」に関連して、元稹「和李校書新題樂府十二首」に基づき、はやくに亡佚した李紳の「樂府新題二十首」の諸作を

比定しようと試みるものである。

第七章「晚唐」考——その定義と「中唐」との差異（二〇〇二）、及び第八章「王孟韋柳」論考（一九八二）は、いずれも関連する詩話の分析に係る論考である。このうち前者は、前書の「大曆から元和へ——「中唐」の文学史的意味」（一九九八）を承ける。唐宋詩の進展（唐音）「宋調」において、時代区分の一である「中唐」（高棟）、並びに体格区分である「大曆体」及び「元和体」（嚴羽）に対して、杜甫を主と見る方回にあつては盛晩対立のもと大曆体と元和体は分かたれ、音律の正変を論じた楊士弘にあつては、「正音」を比定するにあつて、それは盛唐とこれを継ぐ大曆体にあたり、したがって、元和体は晩唐（遺響）にあたるとする。また後者は、「王孟韋柳」評考——「王韋」から「韋柳」へ（二〇〇〇）の先蹤であり、四家併称の分析は、二家併称の変遷を作品の受容関係や詩話評論の評価を対象として分析しつつ、本書ではさらに明代合刻本の状況を視野に入れておられ、考察の対象を広げてなお細密に分析を加えておられる点は極めて優れる。

右に取り上げた論考のほかにも、第Ⅱ部「講演集」には、第二章「身体・小風景・宇宙」を収め、道教研究より発して詩句の措辞を考察し、また、第三章「中国における寄り合いの文学」

を収め、中唐に盛行した「文会」「詩会」やその聯唱聯句の作について考察された。

このように、本書はまことに經典沈深、載籍浩瀚と言つてよく、とりわけ本書の目次に見る如く整然として均整な思量を要する力強さは、またさらに「谷（やと）」の風景（二〇一九）に見る如く流麗かつ清閑な筆致とそこに織りなす思考の縦横な展開と相俟つて、氏の文学に向かう揺るぎない姿勢をあらためて感得するものである。

（A5判上製、三三三頁、研文出版、二〇二四年五月発行、定価六五〇〇円＋税）